

# 苦悩する現代青年の周辺 (アジアを歩いて)

—カンボジアを教育の視点で見る—

中  
谷  
陽  
子

序

教育を求めて

(一) 苦悩は見てきたか

(二) 教育の悲劇とは

(三) 苦悩の挑戦

(四) 若い教師へのインタビューから

まとめ

## 序

現代青年とは言ったものの、世界中が混乱の中にいる今、青年一般を論ずることはできない。かつては宗教や民族がちがっても人類に共通した価値観や理念があり、まだ会ったことのない者同志、人間の尊厳や苦悩を察し合うことができたのである。しかし今、様々な争いに傷ついた人々の心、特に青年の心を察するためには、直接触れることが何よりである。

平成八年度研修期間中に重ねたアジアの旅は、「心の時代といわれる中で人はどのように生きるか」という際限のないこだわりのテーマの中で、特に苦悩するアジアの青年の周辺を辿ることを目的にした。前途ある青年が深い混沌の中で傷ついた世界を荷なう宿命にある今、青年たちの心のゆとりはギリギリ一杯である。その中で彼らが豊かな創造力を貯えていってくれるためには、青年たちを苦悩から少しでも解放しなければならない。マレーシアに始まりタイ・カンボジア・フィリピンの島々を巡り歩く中で私は、相手について一歩理解を深めるばかりでなくそこから私自身も多くを受取ることができたと確信したのである。

本報告はその中でも最も苦悩の多いカンボジアの青年との接点をまとめたものである。

## 教育を求めて

## (一) 苦悩は見えてきたか

青年を苦悩させるものの第一は教育である。教育の機会に恵まれている社会でも、また不足しているところでも青年たちは決して教育によって満足した記憶はなく、期待すればする程大きな苦悩と出あうことになる。日本が今、教育で苦しみもがく実感を自分自身の尺度として捉え、隣人であるアジアの青年の直面している教育課題を、実感できたものについて述べたい（それは全体の一部ではあるが）。

「教育」とは社会で頻繁に使われる言葉であるが、その多様な中身をひと言にまとめて、時代を越え教育を受ける人々の多様性を越えて定義づけられるだろうか。大方の公平論をもとにすると次のように言えるのでは——それは人間の中に知性をその萌芽から育て、自分の頭で思考（考えたり判断したりする）できるようにすることである。但し時代の歴史解釈を強制せず、また世界の人々と知り合って多様性と普遍性を理解できるように人間を根気よく育てることである——と。

これは教育の本質を求めたものであるが、基礎教育レベルの諸条件が成ってはじめて描くことのできる教育の姿である。世界中の多くの若い人々が自国の歴史と社会の要求のために無理な教育を強いられてきた現在、分かってはいいても将来理想的な教育へと道が開かれるのは大変むずかしいことである。日本としてその例外ではないが、

悩む姿は同じように見えても苦悩の内容はその困難の度合いにおいて全く異なるという事実を知らなければならぬ。

基礎教育レベルの条件とは何であろうか。教育の機会が生み出されるためには、次の三者がどのように関わるかということになる——④知識人(含む教師)、⑤学習意欲を持つ者、⑥学習意欲の乏しい者、である。人類が長い歴史を歩んでこられたのは、こうした人間の本能とも言える前進を促す知的構造が繰返されてきたからである。

## (二) カンボジアにおける教育の悲劇

しかし一九九六年春～九七年夏にかけての私の体験上際立って困難が感じられたものは、教育上の特異な苦しみである。歩いて集めた資料を見ながら、平和社会で論ぜられる教育と衝撃的な独裁による混乱が今なお続く社会で論ぜられるものとを比較すれば、そこには大きな隔たりが存在するということを言いたいのである。カンボジアにはかつて独自の高い文化があったことは、アンコールワット遺跡(八〇二―一四三二ごろのアンコール朝の跡)から明らかにされる。この遺跡はほとんどが宗教建造物であるが、すでにかなりが崩れ落ちた中を歩いてみると神々の像は彫られて削り取られ、再び彫られたりあるいは頭部の欠けたまままで放置されているものなどがある。宗教をめぐる争いだけでなく、本来ならば豊かに残し得た文化遺産が繰返し起った人間の争いによって失われたことがわかる。

教育の基盤までをゆるがすような争いによる崩壊は近年の世界の歴史にはいくつか起っているが、カンボジアの悲劇は一九七五年からの三年余に発生している。ポル・ポト政権の指導者は国土を荒らしたばかりでなく、

多くの有能な人々を葬り去り、それによってカンボジアの大切な知識や伝統など精神文化が後の新しい世代に受け継がれる道を断ったのである。すべての教育の場から教育者を奪い取られた後遺症は深い傷となって癒えず、そのために海外からも学校再建を始めとする多くの応援が届いている現状は衆知のことである。恐ろしいのはこれらの応援活動の模様だけを報道を通して観ているうちに、私達はカンボジアの教育事情がすでに好転し始めたと軽率にも楽観視してしまうことである。町なかに稀に見つけた書店に急いで足を踏み入れてみると、新しく国内で印刷されたものはほとんどなく、人々が本を読む喜びもまだまだ遠い先のことであるのが分かる。

### (三) 青年たちの苦しい挑戦

青年たちの口から語られた教育への挑戦の実際を綴り合わせて行くと苦しい現状が浮かび上り、さらにその中でも青年達がいかに意欲的であるかが見えてくるのである。

#### (イ) 安い教員給与

教員養成コースは再開されたものの、教育資格の改訂の手続きが遅れたためにまだ軌道には乗っていない。しかし教育現場は次々と開かれ、応援の校舎建設も進んで生徒や学生の期待が膨らみ、教員の必要性はとて高いのである。さて問題は教員の給与であるが、月給は30ドルにも満たず、レストランのサービスマンの半額である。聞けば、教師に適した人材を確保することが難しいばかりか教員の資質、教育の質そのものを低下させることにもつながることが想像される。当然生活を支えるためのアルバイトが始まり私塾との二重教師も少なくないという。真偽のほどは不明だが、英語教師の中には教室の教え子に私塾にも来るよう強要し、拒否する

ならば学校での成績評価を下げると脅す事態があったとか、記すことさえためらうような現実を見逃すことはできない。

(ロ) 苦勞する英語習得

カンボジアが国際化を進めるとなると当然、外国語教育が注目されてくる。高等教育ではこの国の歴史・上明らかなように、植民地支配や思想支配からフランス語、ロシア語が教授言語として使用されてきてのである。長い関わりのあるフランス語を除けば、現在は英語教育の時代を迎えている。ポル・ポト政権下で国外に脱出した知識人の中には世界各地で多様な生活文化に通じている者も多いと思われるが、これらの人材を呼びもどしその力を借りるところまで経済的に回復してはいないのである。大学が自ら運営費を稼ぎ出す為に開講している語学学校を除けば、あとは教材も乏しい一般の英語私塾に頼らざるを得ない。若者の中には積極派も多く、観光客サービスの仕事について外国人から英語をまなび取ろうとする意欲的な青年によく出会ったが、次のような笑話を聞かされた——外国人は皆英語を喋るものと信じていたので日本人が余り上手ではないので驚いた、というのである。その人は例外だったに違いないとくやし紛れに言い返したかった。

英語習熟については青年たちの意欲の有無でその差は広がるばかりである。特に年配者や基礎教育を得ていない人（義務教育制度がないため）にとっては、ますますむずかしい課題になる。

(ハ) 探し出せなかった女性通訳

このケースは私の体験談である。私はカンボジアが平和の兆しを濃くしてきた（一九九五年当時）状況をみて、研修中に三〇〇例の母親からの聞き取り調査を実施する計画を立てていたのである。まさに今生まれた我子を

抱いて、子どもの将来にどのような期待を持っているのかを産科の病院内で質問する方法を検討していたのであるが、この研究調査は次の二つの理由で直前に中止せざるを得なくなった——その一つは、女性の通訳が探し出せなかったこと。病院内では男性通訳と組んで調査することは無理であったし、英語のできる女性は完全に定職についていたのである。他のひとつは、直前になって不測の事態が明らかになり調査ができなくなったのである（\*ある外国人研究者が患者の血液を国外に持ち出したという不心得な出来事である。そのとばっちりで、私の研究申請は振り出しにもどされてしまい、とても限られた研修期間内には全うできない事態になったのである。）

#### （四）若い教師へのインタビューから

一九九六年秋のカンボジアは例年になく大洪水に見舞われ、大被害が発生し援助活動も遅々としている最中に私ははじめてカンボジアの地を踏んだのである。運良くNGO（非政府組織）活動隊が地方の教室を見舞うという話が出て、私は通訳共々同行させてもらって実現したのがこのインタビューである。

折からカンボジアは日本というお盆のシーズンにあたり、洪水のトラブルも加わって教室にはひとりの子どもも姿を現さなかったのだが、その代わりにゆっくりとした時間の中で教師へのインタビューに成功したわけである。その全文は別の機会に報告するとして、その中から特に重要な意味を持つ教師の話を用いたいと思う。

#### ★ 教育方法がわからない

カンボジアの教育は懸命な回復努力をしているが、一方ではまだ混乱期でもある。ポル・ポト政権下、クメー





年上の人々への礼をつくすことの大切さを教えるという点であった。それは開所以来、二年目のことであった。

注

カンボジアでは今、青年が年配者を尊ぶことをしなくなったといつて嘆く声が高い。強者勝者をモットーとする世界共通の現象と言つてしまえば「そうだ」といわれるかも知れないが、ポル・ポト政権下で幼児を肉親から離して集団生活させた為に生じた特性とも言われ、青年のそうした意識は年配者から大変心配されている。

青年が自らの子ども時代を振り返ってみた時、カンボジアでは繰返される争いの中で国民は疲弊し、家族は苦しみられ、子ども達は小さな幸せの夢すら抱くことができなかったということが人々のインタビューの声からしみじみと伝わってきたのである。私はある保育所を訪れた時、ひとりの若い先生に「あなたは自分の将来にどのような夢を持っていますか」と問いかけた。ところが、この質問が大変むずかしいものであったということを、その答えを聞いた時に私は理解したのである。「私は年上の先生たちがやることを一生懸命憶えて、独りでもできるようになりたいと思っています」という答えであった。すると隣にいた「年上の先生」と指された教師がつけ加えて次のように言った——「この若い人達は毎日見聞きしている生活の外に、どこにどのような世界があるのか全く知りません。ですから同じ事を繰返して、受継いで行くのです。『夢』といわれても、そのことの意味が多分わからないと思います」と。

この年上の教師のことばは私にとって衝撃であった。青年には多くのことを体験して少しずつ変わって行って欲

しい。変身しながらまた新しい体験を積んで行く間に「夢」がうまれてくるのである。この若い教師は輝いた表情をして、じっと直立しながらこの先輩のことばを聞いていたのである。多分この若い教師の置かれた状況こそが明らかに、カンボジアの青年の苦悩なのではなからうか。

ポル・ポト政権の数年間とその後遺症の何であるかを知らない若者が、どんどん増えている。それはまるで線を引きのように、悲劇を体験した人々の苦悩と掛け離れて、若い世代は自分の中に溢れるエネルギーを持て余す苦悩へと傾いているのである。どのようにしたらこの両者を結び止めることができるのだろうか。

45才の女性教師の言葉だが——「今私たちは皆、ポル・ポト時代に味わった悲しさや苦しさを若い家族に話して聞かせています。どの家族から被害者は出ているのですから。若い世代と苦しみを共有していきたいのです。教科書でも悲劇については触れなくなっていました。若い人達はこの社会でどのように生きていきたいのか、考えるようになると思います。外国からカンボジアを訪れる人達も、どうか心配しないで『ポル・ポト時代は大変だったか』と質問して下さい。今はもう、何でも話せる心境になりました」と。

以上のようなカンボジアの様々な人々から聞かせてもらった言葉を通して、その中から私は自分たちの抱える苦悩についても多くの示唆を受けることができたのである。若いNGOのスタッフの目には、経済発展も大きく違うカンボジアは、彼らが大いに活躍する場所として映るであろうが、戦争の記憶も戦後の混乱の一部も今だに心に残る私にとっては、カンボジアの風景と仏教に根ざした人々のやさしさは、何とも言えないつかしきさとなつて私の研修の貴重なおみやげの箱の中に収まったのである。

## まとめ

現代を生きる上での課題は数多くあげられるが、そのひとつひとつを自分の頭で思考し、大自然の力に畏敬の気持ちを持って臨み、加速された科学と一緒に暴走することなく自分を制することのできる個人を育てあげるのは、“教育”である。カンボジアの教育が一日も早く軌道にのり、青年の苦悩がひとつひとつ解答を得られる日が来ることを念じてやまない。

本研究は、本学平成八年度海外研修制度による研修休暇を得てアジアを調べ歩き、その中からカンボジアに関する資料をまとめたものである。

最後に私の研究調査に協力して下さった次の方々に厚く御礼を申し上げたい。「カンボジア母子保健プロジェクト」のプロジェクト・リーダー、山田多佳子医師、NGO（非政府組織）の「幼いクメールを考える会」の鈴木ひろ子さん、築地和子さんほか皆さん。同じく「曹洞宗国際ボランティア会」のブノンペン事務所長、手束耕治さんをはじめとするスタッフの皆さん、に心からの御礼を述べると同時に、今なお数々の困難を抱えて危険な地域で活動されていることに敬意をお送りしたい。そしてもうひとり、カンボジア言語（クメール語）教育専門家、管野充朗氏にも特に謝意をお送りしたい。研究調査に先がけて、通訳にめぐり逢えなかった場合を考えて、私が準備していた質問項目すべてを表裏—日本語とクメール語で対照させたカード形式の方法を提案し作成して下さい。片言のクメール語指導もお願い

いしただが、余りの発音のむずかしさに断念せざるを得なかったのである。コミュニケーションカードを十分に活用できなかった事情(前述)もあるので、次の機会には是非実施させて菅野氏のご指導に報いたいと願っている。

### 〈参考文献〉

(主なもの)

- ・「カンボジア現代史」W・バーチェット著土生他訳 連合出版一九九二
- ・“A Childven's Doctor in Cambodia” Beat Richner・Beatocello 著 Zinich 1996
- ・「東南アジアを知る事典」平凡社
- ・「朝日新聞記事」一九八〇・八・九付夕刊(三面)  
——少年は見ていた・カンボジア難民の証言——
- ・「地雷に浮かぶ国、カンボジア」P・デービス著 名倉陸生訳、朝日新聞社 一九九五
- ・「カンボジア語」大学書林
- ・「もっと知りたい・カンボジア」弘文堂 一九九六